

鎌倉楽しむ会

紙上散策シリーズ①

「一遍上人」「日蓮聖人」

奇瑞の道

義経の夢「腰越状」

鎌倉楽しむ会

清藤 孝 編

令和七年二月五日

腰越状

源義経

左衛門少尉源義経恐れながら申し上げ候、意趣は、御代官のその一に撰ばれ、勅宣の御使として、朝敵を傾け、累代弓箭の芸をあらはし、会稽の恥辱をすすぐ、抽賞をかうむるべきところ、思いのほかに虎口の讒言によって、莫大の勲功を黙止せらる、義経犯すことなぐして咎をかうむり、功ありて誤ちなしといへども、御勸気をかうむるの間、空しく紅涙に沈めり、しつらつら事の意を案するに、良薬は口に苦く、忠言は耳に逆らうとは、先言なり、二二により、讒者の実否をただされずして、鎌倉中に入られざるの間、素意を述べるに能わずして、徒らに数口を送れり、この時にあたりて、永く恩顔を拝し奉らず、骨肉同胞の儀すでに空しきに似たり、宿運の極まるどころか、はたまた先世の業因に感ずるか、悲しきかな、この条、故亡父の尊霊再誕し給はずんば、誰人が悲嘆を申し披き、何の輩が哀憐を垂れんや、事新なる申し状述懐に似たりといへども、義経身体髪膚を父母に受け、いくばく時節を経ず、故頭殿(父・義朝)御他界の間、実なきの子となり、母の懷中に抱かれて、大和国宇多郡龍門の牧に赴きしよりこのかた、一日片時として安堵の思ひに住せず、甲斐なき命ばかりを存ふといへども、京都の経廻難治の間、諸国を流し行かしめ、身を在々所々に隠し、辺土遠国を栖となし、土民百姓らに服任せらる、しかれども幸慶たちまち純熟して平家一族追討のために上洛せしめ、手合わせに木曾義仲を誅戮するの後、平氏を責め傾けんため、ある時は峨々たる巖石に駿馬をむちうち、敵のために、命を亡するを顧みず、ある時は漫々たる大海に風波

の難をしのぎ、身を海底に沈めて骸を鯨鮓の鯢にかぐるを痛まざりき、しかのみな
らず甲冑を枕となし、弓箭を業となすは、本意あはせて亡魂の憤りを休め奉り、年来
の宿望を上げんと欲するのほか他事なかりき、あまつま義経五位の尉に補任するの
条は、当家の面目、希代の重職、何事がこれに加らんや、しかりといへども、今愁ひ深く
嘆き切なり、仏神の御助けにあらざるよりは、いかでか愁訴を達せん、二二に
り、諸神諸社牛玉宝印の裏をもつて、全く野心をたしはなまざるの旨、日本国中大少
神祇冥道を請じ驚かし奉り、数通の起請文を書き進めしといへども、なほもつて御
宥免なし、それ我が国は神国なり、神は非礼をつくべからず、憑むところは他にあらず、
ひとへに貴殿広大の御慈悲を仰ぐ、便宜を伺ひて高聞に達せしめ、秘計を廻らされて、
頭ちなまきの旨に優ぜられ、芳免に預からば、積善の余慶を家門に及ぼし、永く栄花を
子孫に伝へん、よつて年来の愁眉を開き、一期の安寧を得じこと、詞に書けしハナはず、
あわせて省略せしめ候入をはんぬ、賢察を垂れられんことを欲す、

義経現恐惶謹言

元暦二年五月日

左衛門少尉義経

進上 因幡前司 殿